

戦間期摂津農村の一情景 ——“大阪割烹学校”と、ある豪農の家族誌

伊藤 純

●はじめに

「戦間期」……それは第一次大戦と第二次大戦の間に存在した

た“うたかたの／束の間の平和な時代”（一九一九～一九二六年、大正時代後半）と認識される事が多い。

実際にその時代の様相を振り返ってみると、今我々が「近代的」「モダン」「洋風」「民主」「自由」などという言葉でくくろうとする文化的諸様相

の多くが、この短い時代に胚胎していることに気付く。

第一次大戦に名目的に参戦しながら戦わずに得た巨大な戦利得によつて、日本資本主義は明治以来の悲願であつた近代的産業国家の一端にたどりつく。ビルとハイヤーとネオンに溢れた大都会が現出し、人々は自由に考え自由に自己啓発、自己決定ができる生活空間を獲得した……と信じる一瞬を手にする。

この一文は筆者の実母にかかる“家族誌”である。実父（貴司山治）は大衆小説家であると同時に非常なカメラマニアだったので、摂津の富農の娘であつた実母周辺の人々の多くの情景

を画像として残した。その画像が、テキスト以上に当時の人々の息吹を、まざまざと語つてくれているように思う。

●ある豪農の屋敷を訪れる

“摂津”とは元来、淀川と大阪湾が接する

重要な水運基地「津」

をガバナンスする（＝

摂る）という古代権力

の志向を含意する呼称

だつたと思われる。しかし、長い年月の間に



図① 摂津地方の大きな溜池は、鎮守の森の神の池でもあった（撮影時期：大正後期 貴司）
(1)

繁栄した市街地に変容し、近代的な都市名がとつて変わり、誰もそこが“攝津の国”であったことを忘れた。

今、我々が“攝津”としてイメージするのは、市街地の後背に広がる広大な平野の光景である。今は住宅がこの平野を覆い尽くしているが、そ

一九二〇～三〇年頃、そ

こには果てしない田園（主に水稻田）が広がっていた。
その広がりの中に点々と集落が点在するが、この地域はほぼ図②のような、広い農耕地の中に数十戸の農家が聚集する集村型の集落であり、集落の各戸はいずれも大きな構えを示し、耕地の生産力、収益力が豊かであることが暗示されている。

実際にそのような場所を訪れてみると、数十戸の家屋が集まる集落が望見できる。その集落のほぼ中央に、白い漆喰の築地塀を繞らした大きな屋敷が見えてくる。仮に“村山家”と呼ぶことにすると、築地塀の外側には幅一間くらいの掘割りが繞っている。

正面に回ると、築地塀が途切れ門長屋に変わる。門長屋を両



図② 豊かな耕地と集村型の集落（大正後期 貴司）



図③ 築地塀と掘割（2007年 伊藤純撮影）



図④ 門長屋と観音開きの大きな門扉（2007年 伊藤純撮影）

翼として城郭の城門かと見まがうような堅固で大きな門がある。

その門は通常は閉じられていて、普段の出入りには幅二尺高さ四尺ばかりの脇門（くぐり戸）を使う。くぐり戸は普段は閉まっているが、力を籠めて押すと「ガラガラ」と大きな音を立てて分厚い板戸が内側に押し開かれる。この板戸には太い鉄鎖が繋がっていて、その鎖の重みで普段は自動的に閉じられている。力を籠めて押すと扉が開くと同時に引っ張られた鎖が大きな音を立て、人の出入りがあつたことを知らせるのである。観音開きの大きな門扉は、滅多に開かれることは無い。

脇門をくぐると、正面に萱葺きの大きな母屋があり、その前は百坪たらずの広い前庭になつてている。画面の中央付近（乳母車が置かれている所）が式台構造の正式の玄関だが、さすがにこれは使われていない。今は人が座っている部分の右側、土間に

の松」の老巨木である。恐
特に目に付くのは、この
庭園の中央に大きく屈曲し
て印象的な姿を示す「五葉

の左側……図⑥で樹木が
茂っている部分は、「築庭」
とこの家族が呼び習わして
いた和風の庭園で、ほとん
ど変容無く百年以上の時の
流れを留めている。

くなっている。

それに対し、この広庭



図⑤ 萱葺きの母屋とその玄関先の広庭
(2007年 伊藤純撮影)

直接通じる出入口が日常の出入りに用いられている。

図⑤では見切れているが、

この前庭のすぐ右側には大きな土蔵があった。更に、図⑥

のGoogleマップで上空から

全景を見ると、もっとも右側の斜線部分は、出入りの小作人が搬入した糲を脱穀して俵詰めにするなど、農作業が可能な広い裏庭が存在していた……。それらは戦後の変遷の中で無くなっている。



図⑥ 上空から見た全体図 (2020年
Google マップ)

らしく、この写真は
実はほぼ九〇年前、す
なわち一九三三年頃撮
影されたものと推定さ
れる。なぜなら一歳く
らいと思われる小生自
身が写っているからで
ある。



図⑧ 「五葉の松」の前の家族写真 (1933年頃
貴司)

族写真の一枚を示す。松の老木の姿は二〇〇七年とあまり変わらないが、この写真は



図⑦ 「築庭 (つきにわ)」と呼ばれている庭園
(2007年 伊藤純撮影)

らく数百年生き続けており、屈曲し大きなウロができる。この古木は、この家の家族にとってシンボルツリーのような存在だったと考えられる。ごとに家族の記念撮影などをこの老木の前で行われる……例えば図⑧に家

族写真の一枚を示す。松の老木の姿は二〇〇七年とあまり変わらないが、この古木は、この家の家族にとってシンボルツリーのような存在だったと考えられる。ごとに家族の記念撮影などをこの老木の前で行われる……例えば図⑧に家

姉妹」の写真である。右が長姉水田（村山）百合、中央が末娘（三女 村山美恵、左端が次女村山恵津（筆者の実母）である。⁽²⁾

● 三姉妹と「大阪割烹学校」



因みに、この写真の撮影者と比定される水田太兵衛は、画像中の長姉水田百合の夫であり、大阪本町に大きな邸宅を持つ醤油醸造家の御曹司であった。ところが商売稼業に全く興味が無く、醸造業は他人に譲り、生涯実業に従事することは無かつた。カメラとグルメとダンスの、マニアックな通人として生涯を暮らした。ただ、趣味に溺れた遊び人とはいえない徹底した人物で、大阪高工（大阪高等工業学校〔現・大阪大学工学部〕）講師の肩書きを持ち、例えは醸造学会雑誌に論文を書いたり『舌鼓のうちどころ・味覚秘帖』⁽³⁾といったグルメ本を出版したりしている。新聞記者をしていた貴司はこの水田と意気投合し、写真の撮影、現像、印画紙作成に至る写真技術を学び、技術だけで無くアート面の指導も受けている。現存するアルバムには印画紙の裏に水田の指導的コメントが書きこまれた貴司や水田自身の作品が多数保存されており、図⑨の写真は会心の作例として水田が貴司に示した一枚である。

中の中の長姉水田百合の夫であり、大阪本町に大きな邸宅を持つ醤油醸造家の御曹司であった。ところが商売稼業に全く興味が無く、醸造業は他人に譲り、生涯実業に従事することは無かつた。カメラとグルメとダンスの、マニアックな通人として生涯を暮らした。ただ、趣味に溺れた遊び人とはいえない徹底した人物で、大阪高工（大阪高等工業学校〔現・大阪大学工学部〕）講師の肩書きを持ち、例えは醸造学会雑誌に論文を書いたり『舌鼓のうちどころ・味覚秘帖』⁽³⁾といったグルメ本を出版したりしている。新聞記者をしていた貴司はこの水田と意気投合し、写真の撮影、現像、印画紙作成に至る写真技術を学び、技術だけで無くアート面の指導も受けている。現存するアルバムには印画紙の裏に水田の指導的コメントが書きこまれた貴司や水田自身の作品が多数保存されており、図⑨の写真は会心の作例として水田が貴司に示した一枚である。

本来なら、このような古い歴史を背負った豪農の子女らは、しかるべき格式の他家に縁づき、大きな物語もなく、静かに時を過ごして代を嗣いでいくというのが普通の成り行きであろう。しかし、戦間期に生きる運命を背負った彼女らには、若干異なる道が待ち受けていた。

彼女たち三人は三人とも地元の女学校を出ると「大阪割烹学校」という料理学校の生徒になつた。

年頃の子女が、いわゆる花嫁修業の常套手段として料理学校などに通うというのは……ところが、この大とりたてて珍しいことではないかも知れない。

……ところが、この大阪割烹学校という料理学校は少し変わっていった。それはこの料理学校は少し変わつていた。それはこの料理学校の生徒たちと校長との集合写真を見ただけで感じられる。



図⑩ 大阪割烹学校“栗拾いハイキング”集合写真（1930年頃 水田太兵衛撮影・推定）

栗拾い……うど刈り……その外、時には曾我廻家五郎一座の総見を企画するなど、この学校は「課外活動」に熱心だった。そしてその最たるもののが『大阪割烹学校雑誌』⁽⁴⁾の発刊である。校友会発行となつており、一見生徒やOGの交流誌のようだが目次を見ると大分様子が違う。

例えば大正一四年のある号の目次を見ると、卷頭の記事は

「うど刈りハイキング」(図11)と注記されている集合写真である。(うど(独活)は香りの高い山菜風の植物だが江戸時代から大阪府茨木市など(旧三島郡)で栽培されており「三島うど」というブランドで認知されている)



図11 “うど刈りハイキング”の一シーンに写しこまれた的場校長。なお、たまたまこの左端に写っているのは三人姉妹の長姉水田百合である(1930年頃 水田太兵衛撮影・推定)

もう少し大写しになつたものを見るとそのアウトロー的風貌は更にはつきりする。「うど刈りハイキング」(図11)と注記されている集合写真では、花嫁修業の料理学校の校長という感じではない。

しかし、この雑誌を発刊した「大阪割烹学校」は現存せず、その実態や

雑誌に「相対性理論」……AINシユタインなのか、その発想はほとんど推理不能である。その他「仏教における女性観」とか「婦人の政治的生活」とか、とても料理学校の雑誌とは思えない。

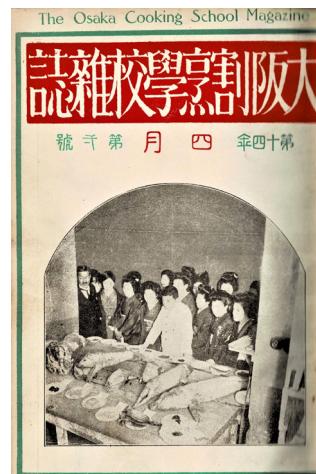


図12 『大阪割烹学校雑誌』表紙

「新しい常識」として婦人の為に相対性理論を説く」という大阪高工料理学校の機関教授の論文である。なぜ料理学校で論を説く」という大阪高工

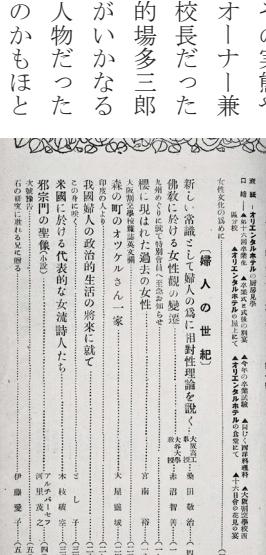


図13 『大阪割烹学校雑誌』目次……相対性理論を説く、という文字が見える

んど伝えられていない。

ところが、既に紹介したように貴司の写真アルバム(5)に関連

の写真が多数発見され、あわせて『貴司山治全日記』(5)を精査す

ると、この雑誌の創刊に深く関わっていたという日を追うよう
な具体的な記述が発見されたのである。

●大正の風

性達に四六時中囲まれながら取り組めるという大変な幸運に出

会つたのである。

貴司はたちまち、この出会いにのめり込むことになる。

ただ、二〇〇ページ近い雑誌を毎月編集発行するというのは、

相当にヘビーな仕事である。毎月の記事企画、原稿依頼、採稿、

執筆、版組、校正……普通なら少なくとも五~六人のスタッフ

が要る仕事だろう。それをここでは、雑誌編集などには全く素

人の的場氏と貴司の一人でいきなり取り組んだらしい。貴司日

記をみていると頻々と学校に泊まり込むという記載が出てくる。

……給料を出してくれる大阪時事新報の仕事はいつやつて
いたのだろう、と思えるほど貴司はこの仕事に熱中する。

残された合本を見るとほぼ欠号は無く月刊が維持されている。

一九二五（大正十四）年、貴司は職業小説家たるべくこの激務
から去り東京へ出て行くが、後年、的場氏から贈られた雑誌合
本の表紙には「苦闘を記念して」という献辞が書き添えられて
いる。

数年後、貴司の妻となつた恵津（前掲の三人姉妹の中姉で、割

烹学校の生徒だった）が久しぶりに古巣ともいって割烹学校を

訪れると……

見るととてもそんなものではなかつたようだ。徳島の田舎から

突然大正モダンの都大阪に出て、新聞記者の職を得るとともに、

新聞記者というサラリーマン仕事を超える「女性向け総合文化

誌の編集発行」というクリエティブワーク、それもキレイな女

……奥さん（＊的場氏の奥さん・伊藤注）はいつものよう

に、ぐちをこぼしてゐる。子供達は例の通りはねまはり三

階ではねずみがあはれてゐる(6)

と、日記に書き記している。

これを察するに……想像ではあるが、割烹学校のオーナー的場氏は三階建ての大きな木造住宅に住み（惠津の記述では割烹学校と子供が暴れている的場の居宅は同じ所と読める）おそらくその三階が割烹学校の教室となつており、二階では的場氏の子供（子沢山だった）がドシンバタンとはねまわり、三階の、授業が終わつて無人となつた教室（料理の実習教室）では鼠たちが食物の残滓を争つて駆け回つてゐる、との的場家＝大阪割烹学校の騒然たる有様を、諧謔と、そして多分の愛着も籠めて書き留めているのだ。

この、雑然騒然とした状況と、自由勝手な発想を展開する的場氏のようなキャラクターこそ、「冷めたるココアのひと匙」などと陰鬱に語るほか無かつた啄木の明治とも、また、田中（義一）サーベル内閣の号令一下戦争の二〇年へと走り出した昭和とも異なる、大正という自由で猥雑で騒々しい時代を表象するものではないかと思える。

しかもそのような自由でアウトローな精神が、そういうものとは最も縁遠いと思われる富農の家の子女にまで、さしたる抵抗もなく伝わつていく社会的文化的構造が、この時代には存在したということに驚かされるのである。

（一一〇二二年一月二二日）

注

（1）以下写真は特記するものを除き貴司アルバムや保存原版による。
それらの画像は「貴司」と表記。

（2）名前は姓／名ともに仮名。

（3）江原釣『舌鼓のうちどころ・味覚秘帖』北辰堂、一九五九年。

（4）『大阪割烹学校雑誌』はその後『婦人之世紀』と名を変え、一九三五（昭和一〇）年まで発刊されていることがわかる。この

ほぼ全ては唯一大阪府立大学図書館に所蔵されており、拙宅にも一九二三（大正一二）年から一九二六（大正一五）年までの三九冊がある。

（5）【DVD版】貴司山治全日記（一九一九年～一九七一年）不二出版、二〇一一年。

（6）脚注（5）と同じ『貴司山治全日記』一九一八年四月六日の項（この前後は妻貴司惠津が書いている）。